



引退賢者は のんびり開拓生活をおくりたい 3

ALPHAPOLIS

鈴木竜一

Suzuki Ryuichi



A large illustration at the top left shows three characters: a young man with dark hair holding a fruit, a young woman with long blonde hair, and a young girl with dark hair. A large octopus is behind them.

オーリン

本作の主人公。
大陸一の大国・ギアディスに
その人ありと謳われる
最強の大賢者——だったのだが、
職場である学園に
愛想を尽かし賢者を引退。
《災いと呼ぶ島》・ラウシュ島で
開拓生活を始める。

イム

バジル村の村長の孫娘。
天真爛漫な性格で、
パトリシアとは大の仲良し。

パトリシア

オーリンを慕う元教え子。
真面目な美少女だが、
思い込みの激しさから
たびたび暴走する。

ブリッツ

オーリンの最強の弟子、
《黄金世代》の一人。
剣技も天然ぶりも
最強な騎士。

ウェンデル

オーリンの最強の弟子、
《黄金世代》の一人。
ムードメーカーな
魔道具オタク。

エリーゼ

オーリンの最強の弟子、
《黄金世代》の一人。
癒しの魔法が得意な
おっとりお姉さん。

ロレッタ

《竜狩り》の異名を持つ、
《黄金世代》の幻の五人目。
長い間、行方知れずに
なっていたが——？

ジャクリーヌ

オーリンの最強の弟子、
《黄金世代》の一人。
強力な魔法と
ツンデレの使い手。

CHARACTERS

◆◆ 登場人物紹介 ◆◆

第1話 食料確保

俺——オーリンが、故郷の大国ギアデイスからこの南の離島^{りとう}、ラウシユ島へ調査のために移り住んで、かれこれ数ヶ月が経^たとうとしている。

初めてこの島を訪れた際は、絵に描^かいたような未開の地という印象で、とても人が暮^くらせるような状態ではなかったな。

あの頃はまだ教え子のパトリシアとふたりきりだったからなんとでもできたが、徐々に人が増えてきてそうも言っていられなくなつた。

——が、そこは俺に離島調査を依頼してきた、エストラーダ王国の全面バックアップもあつて解消^{かいしょう}されつつあつた。

そのひとつの到達点^{きえてん}が、ラウシユ島の拠点^{きえん}の完成である。例の、島で発見した廃墟^{はいきょ}となつた港の近くで土地を切り拓^{ひら}き、そこに村を作つたのだ。

まあ、村といつても、まだ人はほとんどいない。

というか、島の調査がメインなのだから、普通の村とはだいぶ異なる。

そもそも村長って立場の人がいないからな。立場上、俺が責任者ということになっているのだが……特に意識はしていないんだよね。

現在この拠点には俺とパトリシア、バジル村の村長の娘のイム、エストラーダ王国の学者のクレール、俺のギアデイスでの教え子たちである黄金世代の四人、ブリッツ、エリーゼ、ウエンデル、ジャクリヌ。

加えてバリー、カーク、リンダのエストラーダ騎士団の若手騎士三人、さらに商人のドネル、魔法使いのルチア、ターナー率いる職人軍団という顔ぶれが揃っている。

これだけの規模では、村と呼ぶには、まだまだ無理があるからな。

実際に村としての機能を果たせるのは、もうちょっと規模が大きくなってからだろう。

十

エストラーダ王国での、黄金世代集結を祝う舞踏会が終わって、しばらく経ったある日の朝。

「うーん……釣れんな」

この日は食料調達の一環としてパトリシア、クレール、エリーゼ、ウエンデルの四人と

ともに早朝から拠点近くの海に釣りへ来ていた。

舞踏会はエストラーダの悪徳貴族、ミラード卿の反乱により大騒ぎとなったが、黄金世代の活躍により無事解決。

さらに、ギアデイスからサイアン神父らが移住してきた。

これについてはいろいろと難しい問題はあるのだろうが、それでもエストラーダ国王は受け入れてくれたのだ。

おかげで親交のあるサイアン神父や子どもたちが、戦争を起こそうと不穏な動きを見せているギアデイスの脅威から無事に逃れることができた。本当に、感謝してもしきれないよ。

その恩に報いるためにも、謎に包まれたラウシュ島の全貌を明らかにするという大いなる目的があるとはいえ、島で手に入りそうな食料などの物資に関しては、基本的にこちらで調達することになっている。

当初はエストラーダからの支援もあった。

今後も続行していくというのが基本路線であったのだが、最近は人数も増えたため、俺の教え子でエストラーダで騎士をしているグローバーとも話し合い、島へ運び入れる物資の量は現状維持となった。

なので、物資量をカバーするために漁や採集さいしゅうをしているのだが、そういった原始的な手段にばかり頼るのではなく、この島に来てすぐにパトリシアとイムによって開墾かいけんされた畑での栽培さいばいや、最近ではターナーと相談して新しく牧場をやるかと計画していた。

まさに自給自足。

まあ、どこまでやれるのかっていう未知の部分はあるけど、いざとなれば港町へ渡って買える物もできるし、そこまで深刻な問題でもないからのんびりやらせてもらうつもりだ。

というわけで、島の調査を続行しつつ、この自然溢あふれるラウシュ島の力を借りた新しい生活スタイルの確立が当面の目標となる。

——で、その足掛かりという意味も込めて釣りへやってきたのだが……

天候は快晴。

気温は暑あつすぎず寒ふせすぎず。

波も穏おだやかで緩ゆるく吹く潮風しおかぜが心地こころよい。

でも、釣果はお世辞せじにもいいとは言えなかった。

魔道具技師まどうぐしであるウエンデルが得意の物作りで人数分の竿さおを用意してくれたのだが、どうにも手応えがない。

釣りをするにはこれ以上ないくらい最適な環境かんきようなので、当たりが来るまでのんびりと構えていればいいんだけどな。

食料事情を考慮こうりょすると、さすがにそこまで悠長ゆうちやうに構えてはいられないか。

「この辺りに魚はいないのでしょいか……」

「でも、海に魚がないなんてことは……」

並んで釣りに挑むエリーゼとパトリシアは、うんとも言わないウキを眺めながらため息を漏らす。

ウエンデルも必死に釣果をあげようとあちらこちら場所を変えて挑んでいるのだが、今のところ結果に結びついていない。

ただ、悪い展開ばかりではない。

「先生！ たくさん採れたよ！」

「ちよつと潜もぐるだけでもかなりの量がありました！」

興奮こうふん気味に俺たちのもとへやってきたのはイムとクレール。ふたりの手には木製のバケツがあり、そこには大量の貝が詰め込まれていた。

「凄すごいじゃないか。これだけあれば職人たちも満足するよ」

ふたりの活躍により、何も釣れないって事態は免まぬれそうだが……それでもやっぱり魚

は欲しいよな。

「イム。バジル村の人たちは海の魚を手に入れるのに何か工夫をしていなかったか？」

「工夫……あつ、それならアレを試してみよう！」

「アレ？」

どうやら、島民であるバジル村の人たちには何かとっておきの策があるらしい。

十

イムはそれを用意するために一度別行動を取り、帰ってきたのは一時間後。

その間も、俺たちの持つ竿はしなることさへなかった。

そして、帰ってきたイム。

この絶望的な状況を変えるためにイムが用意した物とは――

「これだよ！」

バケツ一杯に入った謎の物体だった。

茶色くてドロドロしたそれは手に触れるのが少々ためられる。何よりきついのはその臭いだった。

「うおお……な、なかなかパンチの効いた臭いだね」

ウエンデルが顔をしかめる。

だが、それも無理はないとフォローを入れてしまいうくらい、強烈な臭いを放っていた。生臭さと甘ったるさが絶妙に混じり合っている感じで、長時間嗅いでいると体調を崩してしまいうさうだ。

しかし、イムはこれこそ漁を成功させるためにバジル村の人々が行う秘策だという。

「そ、それを一体どうするんだ？」

「これを――こうするの！」

「……ええっ!?」

まさかの行動にウエンデル、エリーゼ、パトリシア、クレールの四人はたまらず叫ぶ。

あのようなどんでもない悪臭を放つ謎の物体を海に放り込むとは予想外だった。これで

本当にうまくいくのか？

「イ、イムさん？ さすがにこれはちよつと……」

表情を引きつらせたパトリシアがやんわりと抗議をする。

――が、その時、突然海面がバチャバチャと音を立てた。

「な、何なんですか!？」

「さ、魚だよ！」

ウエンデルが指さす先には、確かに魚の姿があった。

どういうことだ？

さっきまで影さえ見えなかった魚たちが、まるで湧き出たかのごとく集まりだしている。というか、この近くにこれほどの数の魚が潜^{ひそ}んでいたのか……それなのにまったく釣れないのはやっぱりエサが悪かったのかな。

「——っ！　そうか。エサか」

「エ、エサ？」

不思議そうに尋ねるクレールだが、賢い彼女はすぐに状況を理解した。

「もしかして……さっきイムさんが海に投げ込んだのって……魚をおびき寄せるためのエサだったのですか？」

「そうだよ！」

笑顔で答えるイム。

俺もその結論にたどり着いたのだが、ウエンデルは納得がいていないようだ。

「あの悪臭放つ物体がエサ？　そんなバカな！」

「魚たちにとって、あれはご馳走^{ちそう}の香りなの」

「ア、アレが？」

「うん！」

屈託^{くつたく}のない笑みで返事をするイムだが、やはりウエンデルは腑^はに落ちない様子。なら、ここで俺の予想を話してみるとするか。

「イム……あのエサに使われていたのは、魚たちのエサになる小さなエビや強い臭いを放つ果実じゃないか？」

「正解！　さすが先生！」

やはりそうか。

「せ、先生は知っていたんですか、アレの正体^{しょうたい}を」

「いや、具体的にどんな物であるかについては分からなかったが……強い臭いを放つ果実などで生き物をおびき寄せるといふ罠^{わな}は、他でも用^{もち}いられるからな。それをバジル村の人たちは長年の経験で見つけ出し、実践^{じっせん}したのだらうと思ったまでさ」

「な、なるほど……」

ここでようやくウエンデルも納得したようだ。

「さあ、せっかくこれだけの魚が集まったんだ。今までの分も釣りまくるぞ」

「はい！」

竿を持つパトリシア、エリーゼ、ウエンデルとともに、海面で暴れている魚たちへ向かって糸を垂らす。

すると、これまでの静かな状況がまるで嘘だったかのように次々と魚が食いついてくる。あまり釣りすぎても食べきれないし、下手をしたら生態系に変化をもたらしてしまうかもしれないから、最初に数を決め、それだけを釣るようにした。

+

すると、数十分後。

あれだけ粘って一匹も釣れなかったのに、わずかな時間で目標の数に届いたのだ。

「おどろ
驚いたな……ここまで効果絶大とは」

「でも、気をつけてね。魚が集まるとそれをエサにする大型のサメなんかも集まってくるから、やりすぎには注意しろってお父さんによく言われているの」

そう言ってくるイム。

「確かに、そういう弊害もありそうだな」



パジル村の人たちのように船を出して漁をしているわけじゃないから、そこまでの被害は出ないのだろうけど、向こうにも迷惑がかかる恐れがあるから頻繁に使うのは避けたいところだな。

まさに切り札というわけだ。

ともかくにも、イムの活躍で全員分の魚は確保できた。

今日の昼食はこれで十分だろう。

余れば保存食として加工すればいいからな。

「よし。そろそろ拠点へ戻るか」

釣り具を片づけてから、みんなにそう呼びかけた。

魚と貝がずつしりと詰まったバケツを持って拠点へと帰ってくると、ちょうど港の整備から戻ってきたターナーと出くわす。

「あつ、おかえりなさい——つて、大漁じゃないですか！」

「これもみんなイムのおかげだな」

「えへへ」

照れ笑いを浮かべるイムだが、実際、今日の釣果は彼女のアイデアで叩き出したよう

なものだからな。

そんな話をしていると、森からふたりの男女が姿を現した。

狩りに出ていたブリッツとジャクリーヌだ。

「ふたりも帰ってきたか」

「はい……残念ながら、獲物の確保に失敗してしまいました」

「というより、獲物自体が見当たらなかったたので確保のしようがありませんわ」

落胆するブリッツにジャクリーヌがそうフォローを入れる。

基本的にツンツンした態度の彼女だが、根は優しく仲間への気遣いができる——が、ブリッツには特別甘いように感じるな。

「そいつはついていかなかったな。その分はこちらでカバーするよ」

「おお！　こんなにたくさん！」

「さすがですね、オーリン先生」

「いや、これはイムのおかげだよ」

ここでも話題になるイムの活躍。

それが落ち着くと、今度はウエンデルが切り出した。

「ふたりが手ぶらだったのは他に理由があるんじゃない？」

「……どういう意味ですか？」

「だってさあ、年頃の男女がふたりだけで他に誰もいない森の中にいたんでしょ？ 何か

あったんじゃないかなって——」

「はあ!? 何も起きるわけありませんわ！ 大体、あなたはわたくしたちがふたりで森に入って何か起きると本気で思っていますの!」

「いや、その……ごめんなさい」

「普通に謝らないでくださる!?」

元気だなあ、ウエンデルとジャクリーヌは。

俺としては学園時代から見慣れた光景であったが、パトリシアやイムにとつてはどうも新鮮に映ったらしい。

「森の中で何かあった……一体何のことでしょうか」

「パトリシアも分からないの?」

「ええ……クレールさんは心当たりがありますか？ もしご存知でしたらぜひとも教えてくださいだきたいです」

「あたしも!」

「へっ!? ど、どうでしょうかねえ……」

パトリシアとイムからの純粹な質問に困惑して、目が泳ぎまくるクレール。

……まあ、うん。

がんばって。

しばらくして、気を取り直して昼食の準備に取りかかろうと、イムからたくさんの貝が入ったバケツを受け取った直後——彼女は突然空を見上げた。

「どうかしたのか、イム」

「分からない……けど、このままじゃダメな気がする」

「ダメ?」

眉間にシワを寄せながら、考え込むイム。彼女自身、自分の感じている気配というか、予感めいたものの、正体が不透明で気持ち悪がついているようだ。

「大丈夫ですか、イム」

「う、うん。心配かけてごめんね、パトリシア」

すぐさまパトリシアが駆け寄ってイムを気遣う。

相変わらずいい関係性を築けているようで何よりだ——つて、ほっこりしている場合じゃない。

「本当に平気か？ 体調面に何か異変があるなら遠慮せずに言ってくれ」

「ありがとう、先生。でも、大丈夫だよ。ちよつとだけ変な感じがしただけだから」

ニコツと微笑むイム。

何かあれば、エリーゼの治癒魔法で回復させることもできたが……どうやら体調不良を隠しているようでもなさそうだ。

しかし、どうにも気になるな。

彼女はこう……野生の勘というか、本能が鋭く、察知能力に長けている面がある。時にはジャクリヌの探知魔法よりも先に異変を感じ取ることもあるくらいだ。

そんなイムが何かを感じたのは空だった。

天候に絡む変化を読んだのだろうか。

それともただの気のせい？

いずれにせよ、すぐに答えは出ないだろう。

「先生、早くご飯にしましょうよ！」

「っ！ そ、そうだな」

ウエンデルにせつつかれる形で、俺たちは昼食の準備を始める。

すると、タイミングよくバリーたちが畑から戻ってきた。

彼らは朝から農場管理の仕事に出ており、午後からは俺が視察することになっていた。

「うおっ!? 凄い食材じゃないですか!?」

「こ、豪華ですね……」

「魚は私の好物なんですよ！」

バリー、カーク、リンダの若手騎士三人組は鉄板の上に並んだ新鮮な魚介を前に視線が釘付けとなっている。

その後ろからは商人のドネルと魔法使いのルチアが同じように食材へ熱視線を送っていた。

それにしても、森の食材が手に入らなかったというのは誤算だった。

あのブリッツのことだから、手を抜いたとも考えられないし、そもそも彼をもつてしても捕らえられなかったとなったらそれはもう獲物自体が存在しないという結論に至る。

ただ、まったく見かけていないわけじゃないから、島のどこかにはいると思うのだけど……何か理由があるのだろうか。

「先生、貝も魚もいい感じに焼けてきましたよ」

「おっと、そうだな」

パトリシアに言われて、俺は用意しておいた木皿に魚を置いていく。

せつかくの魚を危うく焦がしてしまふところだったよ。

調理した海鮮に舌鼓を打ちながら、俺はカークやドネルたちから農場作りの進捗状況について話を聞いた。

「カーク、農場の方は順調か？」

「絶対調ですよ。なあ、バリー」

「ええ。王都からいくつか苗は送っていただいているので、午後からはそれを植えていこうかと思っています」

「それなら俺も手伝うよ」

「オーリン先生が手伝ってくださいるなら作業効率が大幅にアップしますね！ 私も負けずに頑張らないと！」

三人の若手騎士は農場の発展に燃えていた。

当初、騎士である自分たちが農作業をするという流れに少なからず不満を抱いていただろう三人だが、今やすっかりそのような雰囲気はなくなった。

心から農業を好きになり、自分たちで案を出し合って工夫している。

農場はこの島の食料事情に大きく関わってくるので、彼らの頑張りにはこれからも大いに期待したいところだ。

一方、ドネルやルチアはまた別の観点から農場を見ていた。

「この島でしか育たない野菜や果物もありそうです。それらの栽培方法が確立できれば、外国の商人たちへのアピールになるのではないのでしょうか」

ドネルはいかにも商人らしい角度から分析している。

ルチアの方はというと、こちらもまさに魔法使いらしい独特な見方をしていた。

「農場作りに必要な地属性魔法は不得手なのですが……今回の農場運営を機に、少しでも克服できるよう努力してみます！」

そっち方面からの意見だったか。

アプローチの仕方は別々でも、農場をよくしていきたいという心意気は伝わってくる。午後から視察に行くのが楽しみになってきたな。

第2話 拠点開発

昼食後。

カーク、バリー、リンダ、ルチア、ドネルの五人とともに、農場へとやってくる。

今回は本人の強い要望もあって、それに加え、パトリシアも同行していた。

黄金世代の四人は近々行う予定の遠征についてルートの確認をするため森へ出ており、クレールとイムは海岸沿いの調査中。ターナーや職人たちは港の整備と、各々が持ち場での仕事に汗を流していた。

その農場だが、この短期間のうちに劇的な進化を遂げている。

パトリシアやイムが手掛けてくれた時も、完成度の高さに感心したものだが、規模からしても家庭菜園サイズであった。

あの頃ならそれで問題なかったが、人数が増えたことにより規模の拡大が求められるが——今の農場は、それを見事に実現している。

「ここまで大きくできたのはみんなのおかげだ。素晴らしい働きだよ」

「我々としてはまだまだ大きくしたいと考えています……ただ、それには少々問題がありまして」

「作業に従事する者の数が足りない……端的に言えば、人手不足ということだろうか？」

「っ！　そ、その通りです！」

バリーの抱く懸念については、俺も苦慮していた。

そもそもエストラダという国自体が小規模で人口が少ない。

港町として発展しており、王都は賑わっているのだが、こちらに人手を回せるほどの余裕はないだろう。

となると、急激に規模を大きくするのは危うい。

この少人数では管理しきれなく可能性が高いのだ。

「ボチボチ王都へ定期報告に行く時期となるから、その際にグローバーへ相談をしてみようと思っている……けど、期待薄だぞ？」

「承知していますよ」

この場にいる五人はエストラダで生まれ育った、いわば地元出身の若手たち。そういう意味では、俺よりも国の内情について詳しいだろう。

人数が少ないという問題点を抱えつつ、それ以外は至って順調なので慌てる必要はない。それと……俺としてはもうひとつの牧場の方が気になるな。

「牧場の方はどうなっている？」

「ターナーさんと話して、厩舎を作る予定ではいます。飼育するのは鶏や山羊などを予定しています」

船で運ぶことになるだろうから、サイズ的にもそれくらいが適当か。

特に、鶏がいてくれたら卵を収穫できる。これは大きいな。

これら家畜^{かちく}についてはドネルが関係各所にかけ合い、入手する予定でいるという。その交渉^{こうぎょう}が一段落つくまで、とりあえずは農場の方を優先してやっていくらしい。

この管理は、若い彼らにお任せ^{まか}するつもりだ。騎士としての知恵や技術が役に立つかどうかはさておき、決して無駄な行為ではないと俺は考える。

農作業は肉体的な鍛錬^{たんれん}にもなるし、仲間たちと成功に向けて一致団結することによりチームワークを育^{はぐ}めるのだ。

「みなさん、とても気合^{きあい}が入っていますね！ なんだかこつちまで元氣が出てきます！」
「まったくだな」

元氣を分けてもらえたというバトリシアの意見には同感だ。

この感じ……どことなく、学園時代のブリッツたちを思い出させる。

今後の成長次第ではあるが、もしかしたら……カークたち五人はブリッツたち黄金世代に匹敵^{ひてき}する存在となるかもしれないぞ。

十

それから、俺は村からそれほど離^{はな}れていない場所にある廃墟となっていた港を訪ねた。農場と牧場は想定よりもずっと順調に進んでいた。

ラウシユ島を探検するための拠点が完成し、次は食料確保が最大の課題ともいえる。なので、バリーやカークたちにはバリバリ働いて美味^{おい}しい野菜や卵を用意してもらわないとな。

港に着き、ターナーに声を掛ける。

「ターナー、調子はどうだい？」

「あつ、オーリン殿^{どの}」

呼びかけに反応してこちらへと振り返るターナーだが、どうにも表情が冴^さえない。

「何かトラブルでもあったのか？」

「い、いえ、そういうわけではないのですが……正直^{しんじつ}、どこから手をつけていいのかなと悩^{なや}んでいます」

彼がそう思ってしまうのも無理はない。

長年放置されていたそこは、とにかく目につくところすべてがボロボロ。

素人^{しょうと}考えだが、ここまでひどい状態となると、いつそ全部解体して一から作り直した方が効率的ではないのかとさえ思えてくる。

「どうするのがベストだろうか」

「……ベースはそのままに、小屋や棧橋といった部分を作り直せば低コストで生まれ変わるのではないでしょうか」

「なるほど」

それがターナーのプランらしい。

「実際にそれは可能なのか？」

「お時間をいただくことになるでしょうが——必ず成功させてみせます」

「頼もしいな。よろしく頼むよ」

「はい！」

こちらは専門職である彼らに任せるとしよう。長らくやっているターナーたちならば、きつとこの港を素晴らしいものとして復活させてくれるはず。

それにしても……改めて周囲を見回すと、本当に何を目的に作られた港なのだろうかという疑問がふつふつと湧いてくる。

恐らく、手掛けたのはエストラダの先代国王なのだろうが、なぜかこの存在を息子である現国王にすら黙^{だま}っており、当人は困惑していた。

仮に、これが何か犯罪めいたものであるというなら隠そうという心情も理解できる。

しかし、エストラダの民にとって未開の地と呼んでいい立地条件を除けば、何の変哲^{へんてつ}もない普通の港である。それを先代国王が秘密にしていた理由は何だろう。

この島については国民もずっと気にかけていたのだから、国家事業としてもっと大々的にやっても反対なんてしないだろうし、むしろ支持する層の方が多数派になるはずだ。

俺は……先代国王の取ったこの不可解^{ふかい}な行動が、この島の謎を解^とく大きなヒントになるかもしれないと予測していた。

そしてもうひとり——この島にたどり着いたとされる謎の人物、オズボーン・リデア氏も欠かせないキーパーソンとなるだろう。

ともかく、港が復活して運用できるようになったら、俺たちの活動の選択肢も大幅に増えていく。

+

パトリシアも交じえ、ターナーと港のプランについて話し合っているとあつという間に時間が過ぎていく。

気がつくと夕暮れになっていた。

「おっと、もうこんな時間になってしまったか」

「夢中になっていましたから、気づくのが遅れてしまいましたね」

「でも、有意義な時間でしたよ。おふたりからいただいた意見を参考にして、この港の完成を目指します」

「無理だけはないようにな」

若き親方であるターナーは、つついっし頑張りすぎてしまう傾向にある。

彼の父親の頃からともに働いている職人たちは全員年上ということもあって、「もっと努力しなければ」という気持ち強いようだ。

でも、それで体調を崩してしまつては元も子もない。彼はこの島の調査にとつて欠かせない優秀な人材であると同時に、俺たちにとつては友人でもあるからな。

特に黄金世代は年齢も近いとあつてかなり親しくなっているし。

ターナーたちは片づけを終わってから拠点に戻ってくるというので、俺とパトリシアはひと足先に帰還。ちょうどイムとクレールも帰つてきたので、今いるメンバーで夕食作りを始めることに。

調理をしながら、拠点周りを視察した内容の中で整理していた。

すべては順風満帆——と、言いたいが、まだまだ準備段階で、エストラーダからの物資に頼らざるを得ない部分も出てくるだろう。

実際、今日の夕食はその物資を材料にしているわけだしね。

人数増加に伴い、食料確保の方法についてもいろいろ考えなくては——
そう結論付けたとほぼ同じタイミングで、ブリッツたちも帰つてきた。

「ただいま戻りました」

「あら、いい匂いじゃない」

「本当だ！ もう歩き回ったからお腹ペコペコなんだよ」

「ふふふ、ウエンデルったら」

いつもと同じ空気で詰め所として使っている屋敷へと入ってきた黄金世代の四人。

心なしか表情が晴れやかに見えるのだが……さては何かを発見したな？

「いい表情をしているけど、何かあったのか？」

「はい。実は果実や山菜がたくさんあるポイントを発見したんです」

「それだけじゃなくて、野生の動物もいたんですよ。今回は確認作業ということで狩つてはこなかったけど、明日改めて挑戦するつもりでいます」

興奮気味に語るブリッツとウエンデル。

食料問題に関して思い悩んでいたところへこの報告は嬉しい限りだ。

「それなら、明日は全員で山菜と果実の収穫、それと狩りに出ようか」

俺が呼びかけると、全員が一斉に声を合わせて返事をする。

舞踏会を通じて交流が深まり、さらには島での共同生活……これら要因が彼らの結束を強めていつているように映った。

それからしばらくして、ターナーたち職人組やカークたち農場組も仕事を終えて詰め所周りに集まってくる。

本日の夕食メニューは野菜と肉がたっぷり入ったスープとエストラダ産のパン。ちなみににおかわりは自由。

過ぎしやすい気候だし、星空も綺麗というわけで今日は外でいただく。

さて、その夕食だが——どちらもおいしいんだけど、特にスープが絶賛の嵐だった。

メインで調理を担当したのはクレールだが、このスープはエストラダの一般家庭で振る舞われる、いわば郷土料理だという。どうりで俺やパトリシア、黄金世代のメンバーといったギアデイス出身者には馴染みがないわけだ。

だが……みんなが絶賛する理由はよく分かる。

トマトベースのスープはちよつと酸味が利いていてうまい。

おまけに野菜がかなり細かく刻み込まれているおかげで、野菜を苦手としているウエンデルでさえ気にせず食べ続けられるのだ。きつと、子どもでも食べやすいようにという配慮からだろう。

「いかがですか、オーリン先生」

「おいしいよ、クレール。君はきつといいお嫁さんになれるね」

「まあ……ありがとうございます」

料理を褒められたクレールは上機嫌になっただけ……そこまでテンション上がるものかな。

彼女の料理がおいしいというのは以前から公言しているはずだが。

「くっ……わ、私も修業しておいしいスープを作れるようにならないと！」

なぜだかクレールに対抗心を燃やすパトリシア。

それを見たイムは「そういう問題じゃないと思うけどなあ」と何やら意味深な発言をしているが……ダメだ。意図が読めない。

最近の年頃の女の子は本当に難しいな。少なくとも、エリーゼやジャクリースの学生時代とはまるで違ったのだが。これも時代の流れか。

しみじみとしなら、俺はブリッツから森の状況を聞く。彼らが今日調べてきたのは俺たちがまだ手をつけていない場所なので、何か新しい発見があるのかと期待して耳を傾ける。「残念ながら、あらかじめ決めておいた地点までの調査は叶いませんでした」「そうなのかな？」

「思っていたよりも木々が生い茂っていて、奥へ足を運ぶのが困難だったんです」「ジャクリーヌは風魔法で木々を吹っ飛ばそうとするし、もう大変でしたよ」

「ウエンデル……余計な話を挟み込まなくてよろしいですわ」

彼らは彼らで苦労していたようだな。

だが、ブリッツ曰く、ここからが本題らしい。

「しかし、収穫もありました」

「と、いうと？」

「大きな川があつたんです。恐らく、島のあるあの大きな山から流れ出ている可能性が高いかと」

「ふむ」

なかなか興味深い話だ。

あの山は、いずれ山頂まで登っていいこうと思っていた。近くに川があるなら、周辺に新

しい拠点を置いてもいいな。アイディアがどんどん膨らんでいるよ。

それをより具体的なものとするため、明日はブリッツたちと一緒に現場を訪れようと思った。島の調査もできるし、一石二鳥だな。

もちろん、話を聞いていたパトリシアとイム、クレールの三人も同行する。

島を新たに開拓していく……謎を解くヒントを手に入れたらいいな。

とにかく、明日が楽しみになってきたな。

十

翌朝。

空には雲ひとつなく、冒険の成功を予感させる快晴だった。

「いい天気だな」

「本当ですねー！」

パトリシアとともに詰め所の外へ出ると、心地よい潮風が吹いてくる。

本来ならばビクニックにでも出かけたところではあるが、そのんびりもしてられない。島の謎解明は、今やエストラダ国民からも強い関心を持たれているからな。

おかげで協力を申し出てくれる商人や漁師も増えているとグローバーが教えてくれた。パジル村の人たちは俺たちともすぐに打ち解けられたし、時間はかかるだろうけど、きつとエストラダの国民とも仲良くなれるはずだ。

その辺は追々交流の機会を設けるとして……今は探索に力を入れよう。

「先生、こちらは準備が整いました」

軽く準備運動をしていると、ブリッツたちが呼びにやってきた。

すでにイムやクレールも準備は万端のようだな。

俺たちはターナーやカークたちに目的地を伝えてから、森へと入っていった。

昨日、ブリッツたちが通ったという、これまでとは違ったルートを通って進んでいくと、やがて水の流れる音が聞こえてくる。

「この距離から……どうやら、かなり大きな川のような」

「ええ。俺もこれまでに見たことがないほどのサイズでした」

ギアデイスにも大きな川はあるけど、それよりもさらに上なのか。

先頭を歩いていくブリッツの後を追っていくと、やがて森を抜け出した。その先には彼の言うように、これまでに見たことのないサイズの川があった。

「こいつは……想像以上だな」

ブリッツが見たことがないなんて言うだけはあるな。

「周囲を可能な限り調べてみたのですが、どうやらこの川の一部分が農場や牧場方面に伸びているようです」

「なら、農業用水としても利用できそうだな」

これは朗報だ。

カークたちが頑張って素晴らしい農場にしてくれているが、最大のネックはそこで使う水の確保だった。生活用の水はキープできているので、あとはそちらで使う水をどうするかって話だが、この川のおかげで解決しそうだ。

ただ、ひとつだけ心配な要素がある。

「これだけ大きな川だと、嵐が起きた時の水害が心配だな」

ラウシユ島近辺の海には、毎年数回ほど嵐がやってくるらしい。その際、大雨が降るとどれくらい増水するのか……そこが怖いな。

「俺もそこが不安要素と睨んでいます」

「こればかりは実際に雨が降らないと把握しきれないな」

少なくとも、この近辺にテントなんかを張らないようにしないといけないな。

第3話 総力調査開始

川の様子を見届けると、さらに奥へ進む。

気になったのは、ここまでモンスターとの遭遇がまったくないという点。

道中は穏やかでこれといったトラブルもなく、非常に安全だった。

ただ、モンスターがまったく存在しないというわけじゃない。

チラチラと見かけるのだが、先頭を黄金世代の四人で固めたところ、モンスターはその強烈なオーラに臆したのかこちらへ近づこうとしなかった。

まあ、彼らが王立学園に通っていた頃から、漂わせている雰囲気は別格だったが……

卒業し、それぞれの舞台で活躍をした今ではそれがさらに研ぎ澄まされている。エストラーダ舞踏会の際にミラード卿絡みの事件が起きた時も、その力をいかなく発揮していた。

改めてその凄さを肌で感じるよ。

黄金世代四人の実力に感心しているのは俺だけじゃない。

「戦わずして勝利……これが黄金世代の実力ですね!」

目を輝かせ、憧れの先輩を見つめるパトリシア。

……だが、俺はそのパトリシアこそ、黄金世代の四人を超える逸材と思っている。

本人に自覚はないのだろうが、これからの成長次第で間違いなく黄金世代を凌駕する存在となり得るだろう。

黄金世代超えの可能性を秘めているのは、何もパトリシアだけではない。

イムもまた、彼女に匹敵する才能を持ち合わせていた。

ただ、イムの場合はこれまで専門的な指導を受けてきたわけではないので、現状ではまだまだパトリシアに及ばない。

それでも、高いポテンシャルに加えて持ち前の物覚えの良さとひたむきな努力で、着実に差を埋めつつあった。それにラウシュ島をあちこち駆け回っていただけあって、凄まじい体力を誇っている。

パトリシアも決して体力がないわけではなく、むしろ学園ではトップクラスにスタミナはあったのだが、イムと比較すると平均くらいに見えるから恐ろしい。

最近パトリシア自身もイムの急激な成長を感じているようで、これまで以上に俺との鍛錬へ熱を入れている——が、両者は険悪な関係というわけではなく、理想的なライバル

立ち読みサンプル はここまで

関係を構築していた。

新たに加わったエストラダ王国から参加している五人——若手騎士バリーとカークとリンダ、商人のドネル、魔法使いのルチアも、才能豊かで将来有望だ。

ここにいるメンツは、同年代と比べると突出した実力の持ち主ばかりだが、五人はそこに絶望するわけではなく、目標として接しているように見える。

彼らにとっても、プラス効果となったわけだ。

そうこうしているうちに、俺たちはある場所へとたどり着く。

そこは広大な湿原だった。

「あれ？　ここって……前にイムが大蛇を倒したところでは？」

「そうだな」

不気味な雰囲気とは対照的に、モンスターが出現してこないと思ったら、こここのヌシともいえる大蛇をイムが秒殺したんだったな……

ここまで来るのにモンスターと遭遇しなかったのはそれも関係しているのかもしれないけど、あのルートで進むと湿原に出るのか。

これはただちに地図へと書き込み、情報を共有しよう。

だんだんと詳しい地理が明らかとなってきたな。今後の調査にも役立てそうだ。

「となると、近くにターナーたちが作ってくれた中継地点用の屋敷があるはず」

以前、ターナーたちに作ってもらった屋敷までの距離が近いのは助かるな。

前回この湿原に来た際は、大蛇と記念硬貨を発見して終了している。その後も近辺の調査を続けてきたが、あの大河には今まで気づけなかった。

そうなると、まだまだ新しい発見に期待が持てそうだ。

しばらくして、湿原の先にある森に入ると、真っ先に小川が出現。

さっきの大河から分岐してきたものだろうか。近くには小高い丘もあり、周囲を見渡せる環境であることから、ここを調査の拠点地に決めた。

大雨など、状況が変化した時には中継地点の屋敷へ避難すればいいし、本当に便利な存在となってくれたな。

改めてターナーには感謝しないと。

「よし。それじゃあ手分けしてテントの用意をしようか」

俺がそう指示を飛ばすと、すぐさま作業を開始。

この辺の手際のよさはさすがだな。